発熱を伴わない咳嗽患者のクラミジア感染症罹患率の検討

渡邉直人、牧野荘平
東京アレルギー・呼吸器疾患研究所

【背景】咳嗽が主訴の非定型感染症には、マイコプラズマ、百日咳、結核、非結核性抗酸菌症などが鑑別となるが、クラミジアもその1つと考えられる。

【目的】今回我々は、発熱を伴わない咳嗽を主訴として受診した患者におけるクラミジア感染率を調査した。またクラミジア肺炎例を提示し報告する。

【対象】H.23年7月-H.24年7月の1年弱の期間に発熱を伴わない咳嗽を主訴として受診した患者で、クラミジアニューモニエIgAとIgGを測定した36名(平均年齢50歳、男性11名、女性25名)。

【方法】クラミジアニューモニエIgAが陽性であった患者の割合を検討した。

【結果】クラミジアニューモニエIgA陽性患者は19名（53%）で、単独感染が16名で、混合感染としてマイコプラズマが2名、百日咳が1名認められた。6名をクラミジア肺炎と診断した。クラミジアニューモニエIgA陰性、クラミジアニューモニエIgG陽性の感染の既往を示す患者が9名（25%）存在した。

【考察】非定型感染症を疑った場合、クラミジアが関与する割合は意外に多く、マイコプラズマ、百日咳感染症同様、クラミジア感染症も念頭に入れる必要があると考えられる。